

二〇二二年一〇月一七日(参加者二三名)

万葉の歌碑訪ふ園の末枯るる	菜
中腹に尖塔しるき秋の山	"
万葉苑秋の七草数へつつ	"
さねかづら縋る詠み人知らずの碑	"
家持の歌碑へなでしこ名残花	"
一穢なき秋天子らの声ひびく	せいじ
どんぐりを拾ひてママにプレゼント	"
万葉の歌碑の面に紅葉照る	"
連鎖して泣きだす園児秋麗	"
日に倦みて憩ふベンチに萩の風	ひかり
草叢のここにいるよと残る虫	"
あるなしの風に尾花は揺れやまず	"
万葉の碑に佇めば小鳥来る	有香
甲山招き寄せぬる尾花かな	"
撫子の一本凜と歌碑に添ふ	"
団栗を並べて遊ぶ母子かな	よし子
杭一本長き水尾ひく秋の川	"
出かけねば損した思ひ秋の晴	"
団栗に子らの歓声響く森	百合

澄む川の底ひを走る魚影かな	"
誦しもして万葉歌碑や園小春	"
昇神の神事の声に天高し	よう子
神楽終へ巫女母親に戻りけり	"
湯玉散る巫女の青笹秋気澄む	"
幸あらんとて拾ひたる木の実かな	宏虎
中空へ丈余のすすき揺れやまず	"
雲一朵なき秋天の甲山	つくし
うら枯れに風渡りゆく歌碑の苑	"
どんぐりはベンチの子らの忘れもの	きづな
秋日和相聞歌碑に鳩睦む	"
秋高く真青な空や甲山	はく子
遠山を透かせて光る薄かな	"
万葉の数多の歌碑に小鳥来る	満天
行厨のベンチに萩の風通ふ	"
秋天へ「いただきます」の声ひびく	"

定例会のみる選

二〇二二年一〇月一七日(参加者二三名)